

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学二年の夏、音和は両親の離婚により転校することになった。野川の近くで、父との二人暮らしを始め、新しい中学校では、担任の河井先生の勧めにより伝書鳩を育てる新聞部に入ることになる。

父がでかけてしばらくのち、湿った風が吹きはじめた。音和はマドをしめながら、学校のある台地の上空に、重々しく雲がたれこめているのを目にした。厚い雲のなかがときおり閃くのは、そこに雷雲があるからだった。

部屋の中には、まだ手さげ袋がひとつのこっていた。インサツ所から配達されたままのクラフト紙につつまれたタバコはいつている。音和はそのなかからひとタバコをとりだしてほどこき、父がしていたように、投げこみのサイズに折りたたんだ。やはり、以前に目にしたものとはちがう仕様だ。

記念写真の特製のフレーム仕上げるサービスつき、と書いてある。赤ん坊の写真ならばスワンやカナリアなどの鳥とりポンをあしらったもの、七五三の写真には、金や銀の縁かざりのついた胡蝶やクジャクのもようがつく。古風にかたよらず子どもじみでもない絵柄が選ばれ、それなりに洗練されているのは、音和にとって意外だった。

彼もまた、伯父の商売の俗っぽさをひそかに批判していたのだが、本館のほかにスタジオを新しくかまえるほど繁盛しているということは、それなりに人の心をつかんでいるのだ。おかげで父も、失業を免れた。

近隣の家で雨戸をたてる音がひびく。雨がふりだしたのだ。まもなく、激しい雨音に変わった。音和は父の自転車までもとつてこないかと耳をそばだてたが、雨音にかき消されてなにも聞こえない。

三百メートルほどさきの神社の参道入り口に、自動販売機といっしょにコウシユウ電話がある。音和はそれを思いだし

た。午後九時半をまわったばかりだったが、隣接する大家の家はすでにひっそりとして、電話をかけてほしいと云うのは気がひけた。音和はコウシユウ電話を目ざして、雨のなかを走りだした。急ぐために、傘はささず手にしたまま走った。家をでたときは、河井に電話をかけるつもりでいた。だが、泣きことを云うために番号を聞きだしたのではない。背なかを雨にうたれるうち、音和はなにかもつと強い自分でありたいと思いはじめた。強情で生意気な点では自覚のある音和だったが、それはたとえば厚く積もった堆積物のようなもので、いくらでも流動する。それらがぜんぶとりのぞかれたときに、のこるものが強くなければ意味がない。

夜だろうと雨だろうと、飲まず食わずで巢を目ざすという鳩のことが思いだされた。休めば危険がます彼らにとつて、翔びつづけることが身を守るもつとも有効な手段でもあるのだ。感情的なふるまいなど、はいりこむ余地がないほどきびしい現実には立ちむかっている。

音和は、やみくもに走るのをやめ、傘をさして歩きだした。神社の参道前へさしかかったとき、前方に自転車のライトが見えた。街灯がそのあたりを照らしている。だから、たがいに相手がだれかをみとめた。

「……どこへいく？」

雨にぬれた父の姿は、音和に梅雨の晩のことを思ひださせた。ただ、今の父には崖つづちを歩いているような気配はなかった。ひらきなおったようすで、なかば平然と雨にぬれそぼっている。

「伯父さんに電話しようと思って、」

音和は気負いながらそう云った。河井に泣きことを云わないときめたあとで、彼が決心したのは、伯父に直接抗議することだった。

「なんの用で？」

「だって、こんなのはフェアじゃない。おとうさんは、もつとまともな仕事ができるのに、それをさせないのはまちがっている。駅まえでのチラシ配りや、郵便受けへの投げこみなら、ぼくにもできる。……だから、ぼくがやると云おうとしたんだ。おとうさんには、ちゃんとした仕事をさせてほしい。」

伯父に電話をしようとしたとき、音和は、父への不当なあつかいに抗議することしか考えていなかった。自分にも何かができるとは思っていなかった。雨にぬれながらも、音和をまつすぐに見つめる父の姿が、彼にそれを云わせたのだ。父は笑みを浮かべた。それを見て、音和の緊張がゆるんだ。こらえていた思いが涙になる。いつのまにか傘を持つ手をおろしていた音和は、ふたたび雨にぬれていた。雨脚がはげしくなる。だが、その雨はこちよかった。

音和の手から傘をとった父は、それを息子にさしかけた。自転車の前かごの手さげ袋は、すっかり雨にぬれている。簡単な防水加工をしてあるが、雨はそれ以上にふっていた。

「それ、ぬらしたらまずいんじゃない？」

音和は手のひらではほを拭いながら父にたずねた。

「たぶん、」

父は笑顔でこたえ、帰ろう、と音和をうながした。ふたりは雨のなかをアパートへもどり、ゆずりあったあけく音和が先に二度目のシャワーをあびに浴室へはいった。彼につづいて父がはいり、ようやく遅い食卓についた。まだ十一時にはならない。だが、この時間、大家宅は寝静まって、気配もなかった。雨音が弱まると、とたんに虫の鳴く声があった。

音和は、先ほど折りかけていたチラシを放りだしたままのに気づき、あわてて片づけた。こっそり手つたおうとしていたのに、きまりが悪かった。

「心配をかけて、すまなかった。でも、私は平気だから。おまえもよけいなことで気をもまなくていい。自分のことに集

中してろ。これでも、おまえが思っているよりはずっとタフなんだよ。とくに、伯父さんにたいしては。いつもの父の意地がでる。

「そういう態度だから反感を買うんじゃないの？」

「おとなしく頭をさげれば、よけいにたたかれるだけさ。……子どものころから、そういう兄だった。」

「憎しみあつてるの？」

父は小さく笑い声をたてた。

「ただの兄弟ゲンカだよ。いまは借金があるから、ほんとうのケンカはそれを返してからだ。そう思つて辛抱してろ。それに、いつまでも兄の世話にはならないさ。」

音和はようやく、自分が考えるほど父はこのチラシ配りを深刻に受けとめていないのだと安堵した。

「可愛げのない弟だね。」

「おたがいさまだ。六歳ちがいの弟に、バスでも新幹線でも飛行機でも、マド側の席を一度もゆずったことのない兄だよ。われわれの亡き父親は、……音和が好きだったおじいちゃんは、兄にも私にも小学生のときからひとつづつカメラを持たせてくれた。だが、旅行先からどつてフィルムを現像にだすと、私のはきまつて感光していて、プリントができないんだ。寝ているあいだに、兄がカメラの裏ボタンをあけるんだよ。証拠はなかったが、ほかに理由は考えられない。そういう兄と、どうして仲良くなれると思う？」

「それもゆがんだ愛情表現なのかも。」

「わかったふうな口をきくなよ。その手の知らなくてもいい俗な云い草を、いったいどこから仕入れてくるんだ？」

おとうさんの書棚にあったミステリー、とは答えず、音和はべつのことを口にした。

「ぼくにもきょうだいがいれば、おとうさんの気持ちも、もうすこしわかったと思うけど。」

「……もし弟か妹がいて、彼か彼女がおかさんと暮らしたいと云つたら、おまえも向こうへいったんだらうな。」

「そのほうがよかった？」

「私が訊いているんだよ。父親の仕事が自分の生活圏でのチラシ配りだなんて、がっかりだろう？」

「……ぼくは、」

④ この父が好きだと、いまなら迷いなく答えられる。自分たちの都合だけで離婚話を持ち出した両親に腹をたて、意地をはって、好きでもない父といつしよに暮らすのだと思ひもしし、態度にもあらわした音和だったが、かつてのぜいたくさのかけらもないいまの暮らしが、さほど苦にならないのは、身近になった父が、ありのままの姿を示してくれるからだつた。

「……いまのおとうさんのほうが……好きだから。かつこうつけているときより、ずっといいよ。」

父は箸をおき、ありがとう、と頭をさげた。そのとたん、音和の目に涙があふれた。父はタオルをさしだした。

「チラシ配りは、私が志願してはじめたことなんだよ。サービスでつけているフレームのデザインを変えたほうがいいと提案したら、伯父さんはサービスなんだからデザインに凝る必要はないと云いつつも、企画は承認してくれた。そのかわり、効果があがつたとはつきり数字に出ないときは、新しいフレームとチラシの製作費を給料からさしひくと云われた。」

「筋は通つてるね、」

父は軽快な笑い声をたてた。「なまいき云つてないで、もう寝ろ。」

音和はたたみの部屋に布団を敷いた。昼のあいだに祖母がきて、日にあてておいてくれた布団は、まだ温かさがのこつ

ていた。音和はほほをあてながら、声ははずませて父をよんだ。

「おとうさん、この布団、ひなたの匂い^{にお}がするんだよ。」

「……それが、うれしいのか？」

⑤「うん、うれしい。すごく気持ちがいい。」

「もつとはやく知れたかったよ。おまえをよろこばせるのが、そんなに安あがりなことだったとはね。」

「ぼくも、ひなたの匂い^{にお}がこんなにいいものだなんて思わなかった。」

音和は、しばらく布団にうつぶせていた。彼が味わっていたのは、ひなたの匂いばかりではなかった。意識のなかでくすぶっていた父への不満やわだかまりが融^とけてゆく、そのこちよさをいっしょに味わった。

(長野まゆみ『野川』河出書房新社)

※フェア……公平なさま。

問一 線部(a) (e) のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みを答えなさい。

問二 線部A「耳をそばだてた」・B「みとめた」について、後のI・IIの各問いにそれぞれ答えなさい。

I 「耳をそばだてる」の語句の使い方として、もつとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

「耳をそばだてる」

A 卒業式の服装について、うさぎのように耳をそばだてて話した。

I 落し物を届けてもらったので、感謝して耳をそばだてた。

ウ 意外な知らせに、あきれかえって耳をそばだてた。

エ 何が起こったかと、物音のする方へ耳をそばだてた。

オ 寒かったので、家路を急ぎ耳をそばだてて帰った。

II 「みとめる」について、本文中と同じ意味で使われているものとして、もつとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

「みとめる」

A 彼は、自分^{かれ}が書いたものだ^とみとめた。

I 運動会で、一生懸命^{いっしょうけんめい}頑張った^とみとめられた。

ウ 彼は、優秀^{ゆうしゅう}な人物だと周囲にみとめられている。

E 暗闇^{くやみ}の中、マドに映った影^{かげ}をみとめた。

オ 提出は、二日以内であればみとめる。

問三 線部①「音和はなにかもつと強い自分でありたい^{おとわ}」^①とありますが、これについて次のI・IIの各問いにそれぞれ答えなさい。

I 「もつと強い自分でありたい」とありますが、「もつと強い自分」とは、どのような「自分」になることですか。本文中の言葉を用いて三十字以内で答えなさい。

II この「思い」は、音和にどのような行動の変化をもたらしましたか。本文中の言葉を用いて二十五字前後で答えなさい。

問四 線部②「それ」とありますが、「それ」のさす内容を本文中の言葉を用いて三十五字以内でまとめなさい。

問五

——線部③「だが、その雨はこちよかった。」とありますが、なぜ、「こちよかった」のですか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 強くありたいと気負っていた自分を父が暖かく受け止めてくれたと感じたから。

イ 自分をみとめてほしいと張りつめていた気持ちだが、父の笑顔でほぐれたから。

ウ 伯父の父への対応に怒りを感じ、ほてった体を雨が冷ましてくれたから。

エ 父の抱いている伯父への不満を自分が理解しているとわかってもらえたから。

オ 伯父に抗議したいという自分の思いに父が賛成してくれたと思い、安心したから。

問六

——線部④「この父を好きだと、いまなら迷いなく答えられる。」とありますが、それはなぜですか。本文中の言葉を用いて、三十五字以内で説明しなさい。

問七

——線部⑤「うん、うれしい。すごく気持ちがいい。」とありますが、どのようなことが気持ちよかったのですか。二つ答えなさい。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

たいていのことは、ある方向だけで、無条件によい、というものではない。

いろんなことが、なんでもうまくこなせる人間を、「才能がある」とよく言うが、^①うっかり才能があると、人生のところで、ワナにはまりやすい。また、そうした人が目的追求に一心になっていたりすると、たいていイヤミになる。才能をハナにかけてる、といったようにもうつりやすい。自分の才能にブレーキをかける、といった、少し手のこんだことをする必要が生じたりする。

^②理屈にたつしゃで、論争に強かったりするのだって、考えものだ。人間というものは、他人の理屈で納得することは、まずない。自分の考えとして、納得しなければだめだ。理屈の上で他人に抑えつけられたって、むかつくぐらいのものだ。ときには、理屈に負けてくやしきまざれに手を出す、なんてのもよくある。じつはぼくは、理屈はたつしゃなのだが弱虫だったので、子どものときに、^③なるべく相手を言いまかさないうにする、世渡りの術をおぼえねばならなかった。

みんなに人気があったりすると、なかでも異性に人気があったりすると、とてもよさそうに思う。しかし、人気というのはこわいもので、どんなに自分を守ろうとしていても、オダテにのるようになってきている。また、せっかくみんなに人気があるとき、それを嬉しがらないようでは、いやにヒネクレていて、これまたイヤミである。他人にほめられたり、人気があったりするもの、なかなかツライもんだ。

先頭になつて、みんなをまとめるのが上手なんてのも、いやおうなしに先頭にたたされると苦勞がたえないし、多少のオゴリは、どんな謙虚な人にも生まれてくる。自分にたいして無理をしやすくなるし、無理をしていると、その

うちにヒズミが出てくる。

すべて、「よい」だけのことはない。勉強だってスポーツだって芸術だって、そして容姿だって性格だって、すべてそうだ。よいことには、悪いことがついてまわる。

中学生ぐらいの時は、自分と他人が見えてくるだけに、自分には他人のいろいろが、とてもよく見える。あのようになりたいな、などと努力してみたりもするのだが、それがその人の身についたものでないと、^④たいていうまくいかない。それが逆転しては、自分がひどく劣^{おと}ったもののように、思ったりもする。ときには、きみがうらやんでるその相手も、ひそかにきみをうらやんでいて、おたがいが心の底でいじけあっていたりもする。^a隣の芝生はよく見える、というやつだ。

かりに、他人のタイプをとりいれて、たとえばグズの人間が走りまわったり、オッチョコチョイが落ちつきをみせても、ある程度はそれもよいものだが、とことんまくいかないうな気がする。自分の身にそなわったふうになら、生きられないのではないかと、^⑤ほくはやや宿命論的な気分を持っている。

当節では、宿命論者は反動的、ということになっている。生まれつきでどうしようもないのではなく、努力次第で、人間はいかようにも変革可能、というのが^⑥進歩の思想ということになっている。たしかに、生まれつき頭の悪いのはダメとか、生まれつきセンスの悪いのはダメとか、そういったものではない。たとえば数学なんて、「頭のよい人にするもの」などと、いまだに本気で信じている人が多いが、たいていの人それぞれに、できるものだと思う。

ただし、そのやり方は人による。オッチョコチョイなやり方で数学をやったって、グズなやり方で数学をやったって、どちらも可能だろう。その場合に、生まれつきのオッチョコチョイがグズのやり方をとりいれたり、生まれつきのグズがオッチョコチョイのやり方をとりいれる、それぐらいが限度で、オッチョコチョイがグズに生まれかわったり、

グズがオッチョコチョイに生まれかわったりは、無理だと思し、^⑦可能であつてもつまらないと思う。

他人のなにかに、自分がないものを見つけ、それを理想として、自分が向上しようとする事、それはたしかに成長の一段階ではある。しかしながら、結局は自分は自分であつて、他人のその理想に到達できないことは、心得ておいたほうがよい。そして、その理想に自分が及^{およ}ばないからといって、落ちこまないほうがよい。

そして、いくら理想と見えても、他人のその理想も、自分自身と同じように、よいことと悪いことを、かねそなえているものだ。自分というものは、理想のためにあるのではなくて、自分自身のためにある。自分の持つてゐるイヤなところも、かならずよいところを伴^{ともな}っている。そちらのほうを、うまく育てることを考えるのが、問題なのだ。

自分のよさを見つけていくというのは、案外に、他人のよさを見つけていくことよりも、難しい。だれでも、多少はうぬぼれはあるものだが、自分のよさを見つけていくのは、それとまた別だ。

たいていは、よいところといやなところは、重なりあっているものだが、他人については、そのよさが目だつてうらやましく、自分のほうでは、いやな部分が目について、それを他人にかくしたくなる。

なにごとにも、よいことと悪いことが重なつていふ言つても、それを恐^{おそ}れて、なにもしないのは、もつと悪い。自分に、よさと悪さが重なつていても、それを人に見せまいと思つてかくしているのは、もつと悪い。

中学生あたりでは、自分にはイヤな性格があると思ひこみ、それを他人に見せまいとイイコぶるのに疲^{つか}れてはてることが、よくある。イヤなところを見せては、他人にきらわれるのではないかと、それがこわくて内にひきこもつていることもある。実際はたいてい、イヤなところを見せるより、イヤなところを見せまいと引きこもつてゐるほうが、よほど他人にきらわれる。

それに、そのイヤなことというのは、自分が思うほどには、他人にいやがられるものではない。かりに、本当に他

人にきらわれるとしても、そこをさらけだして、あの人はいやな人だ、しかし、おもしろい人だ、とまでならなくては、一生イジイジし続けねばならない。そして、なんのイヤミもないと他人に好かれる、というのは、あまりないし、あつてもたよりない感じで、イヤなところがあるが気に入った、といった目で見られるようになるほうが、ずっと味のあつた人柄になる。

だれにも悪口を言われないようにしている人というのは、そのこと自体で、みんなからよく思われない。他人を意識しはじめた中学生のころに、他人の悪口が特別に気になるのは仕方がないにしても、悪口を言われないようにしようという、その態度自身が他人の悪口の材料になりやすい、という事実には早く気づいたほうがよい。

少し樂觀的なかもしれないが、人間というものは、本来はそれぞれの性格を持ち、それぞれの才能や容姿を持ち、それはいいところと悪いところが重なりあつて、他人から見れば好かれたりきらわれたりしながらも、それがそのまま生きていけば、たいへんおもしろいものだ、とぼくは考えている。人間がその人らしく生きていくさまというのは、すべておもしろい。

自分は、自分のようにしか生きられない。そして、本当にそのように生きているのは、おもしろい。他人よりもまず、自分が自分をよく見ることができれば、自分にとっておもしろい。そして、これがぼくの一番樂觀的なところかもしれないが、本当に自分を楽しんでおもしろく生きている人は、他人が見てもおもしろい。そして、他人だって、おもしろいからには、きみを好ましく思ってくれるはずだ。

才能や容姿だって、自分自身を出したほうが、ずっとよい。たとえば、アメリカの黒人は、昔は白人のようになると、肌を白くしようとしたり、髪の毛をまっすぐしようとしていたが、それは少しも美しくなかった。黒人が美しくなりだしたのは、ブラック・イズ・ビューティフルと、自分自身を出しはじめてからである。そしていまでは、テ

レビのコマーシャルでも、黒人が魅力的な姿を見せている。自分を出しているものは、美しいのだ。

いろんな才能だって、その人にしかない味が出せるのが最高だろう。日本の昔の芸人などで、芸が好きでその道に入つたものの、不器用で才能がないと言われ続け、それでも芸から離れられずにいるうちに、ふと気づいてみると、他のだれとも違った味を持った名人と言われるようになっていた、なんて話がある。それをべつに、努力精進のあいあつて、なんて芸道物語にする必要もあるまい。その人の味が、その人の芸と一体化してきたとき、不器用で才能がないように見えても、みんなが感心するような芸人になってしまつていたのだ。

もちろん、若い間は、普通の意味で才能があつたり、普通の意味で容姿がととのつていたり、普通の意味で性格がよかつたりしたほうが、楽に世がわたれる。しかし、一生がそうというわけでもない。

それに、かりにいま、そうした点で本当に他人から低く見られているとしても、その自分を出して、自分にしかないタイプで進んだほうが、自分の才能はよりよく開花する。自分自身の容姿の特性を生かしてくらしただけで、より美しくなれる。自分の性格をかくことなく他人とつきあつたほうが、他人がききをもつと認めてくれるようになる。

(森 毅『まちがったっていいじゃないか』筑摩書房)

問一 —— 線部①「うっかり才能があると、人生のところどころで、ワナにはまりやすい。」—— 線部②「理屈

にたつしやで、論争に強かつたりするのだって、考えものだ。」とありますが、筆者がこのようにいうのはどのような考えからですか。本文中の言葉を用いて、六十字以内で答えなさい。

問二 ——— 線部③「なるべく相手を言いまかさなようにする、世渡りの術」とありますが、「なるべく相手を言いまかさなようにする」と同じ内容をたとえを用いて表現しているところを本文中から十五字以内で抜き出して答えなさい。

問三 ——— 線部④「たいていうまいかない。」とありますが、それはどうしてだと筆者は考えたのですか。本文中の言葉を用いて答えなさい。

問四 ~~~~~ 線部a「隣の芝生はよく見える」ということわざと意味が近いものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 隣の宝を数える
- イ 隣のもちも食ってみよ
- ウ うちの米より隣の麦飯
- エ どんぐりの背くらべ
- オ 遠い親戚より近くの他人

問五 ——— 線部⑤「宿命論的な気分」とありますが、どのようなことですか。——— 線部⑥「進歩の思想」と対比しながら七十字以内で説明しなさい。

問六 ——— 線部⑦「可能であつてもつまらないと思う。」とありますが、それはどうしてですか。説明しなさい。

問七 ——— 線部⑧「味のある人柄」とありますが、どのような点で「味がある」と思われるのですか。二十字以内で答えなさい。

問八 ——— 線部⑨「他人がききをもつと認めてくれるようになる。」とありますが、どのようにすれば認めてくれると、筆者は考えているのですか。次の中で、正しいものには○を、間違っているものには×を書きなさい。

- ア 普通の意味で、才能や容姿に恵まれ、性格がよく、しかしそれらに満足することなく、謙虚に自分の特

性を生かそうと努力する。

- イ 自分は人から嫌われる性格をしていると自覚したら、多くの人に受け入れられるように、自分の性格を大切にしながら合わせようとする。

- ウ 不器用で才能がないといわれ続けても、芸から離れず打ち込んで、その人にしか出せない種類の芸の域に達する。

- エ 理想の自分になるために、自分がないよい点を持っている人を目標に掲げ、自分の不十分な点をなるべく減らそうとする。

- オ 他人から悪口を言われることがあつても、自分本来の性質を大切に考えて、人にはそれぞれ良いところも悪いところもあると、自分らしく生きる。

問九 この文章にはカタカナ表記の語がたくさん出てきますが、それらのカタカナ表記の説明として適切でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「ブレーキをかける」のように、外来語なのであてはまる漢字がなくカタカナ表記にしている。
- イ 「ブラック・イズ・ビューティフル」のように、英語なので発音をカタカナ表記にしている。
- ウ 「オダテにのる」のように、人間性の弱点が深刻にならないようにカタカナ表記にしている。
- エ 「才能をハナにかけ」のように、読者の想像力を呼び起こそうとしてカタカナ表記にしている。
- オ 「オッチョコチョイ」のように、意味だけでなく音の面白さからもカタカナ表記にしている。

$$\left[\begin{array}{c} \rightarrow \\ \rightarrow \end{array} \right]$$
[illegible]
$$[\rightarrow]$$
[illegible]

国語解答用紙（二回目）

(注意 字数に制限のあるときは「、」「や」「。」「も」一字とします。)

総	点
科	目
国語	
受験番号	
氏	名